

海王星の春分点通過と歴史の区切り

——文明最後の八一九年（二二〇六～二〇二五年）を振り返る——

高橋 徹

この世紀の大転換期には、経済的な必要性にうながされ、時間が大自然の手から奪いとられて、^{おもり}錘の振動で作動する機械の歯車に幽閉されることになる。歴史家たちが遡って調べることできたところでは、それは一二七七年から一三四〇年の間の出来事だった。……ヨーロッパではにわかに従来より信頼の置ける機械時計の製作が可能になる。時間はそれから着実にその領土を拡大していった。⁽¹⁾

はじめに——歴史の周期的な見方に基づく試論

太陽が地球をとりまく天球上の春分点を通過する時を春分と呼ぶ。春分を含む二十四時間が春分の日である。そして、春分から次の春分までを太陽年または回帰年と呼ぶ。回帰年と呼ぶのは、太陽が再び春分点に戻ってくることを示唆しているからだろう。つまり、太陽が春分点を通過し、次に春分点を通過するまでが一太陽年（一回帰年）で、これが現在、三六五・二四二二日と計算され、太陽暦などの仕組みの基準となっている。このよう

に地球の側から見ると、太陽は春分点を通過して、再び春分点に回帰するまで一年（一太陽年）かかるわけである。⁽²⁾

このように春分点というのは、太陽などの特定の天体の動きを計測するときの始点（起点）または終点という意味での基点となる。これは太陽に限らず他の惑星等についても同様で、たとえば海王星が一度、春分点を通過して次に春分点を通過するまでの周期は平均一六四年（より正確には一六三・七年）で、これを「海王星の春分点通過（回帰）周期」と呼ぶことができる。⁽³⁾ 海王星が前回、春分点を通過したのは一八六一年四月から翌一八六二年二月にかけてだった。今回、同様のことが二〇二五年三月から翌二〇二六年一月にかけて生じている。

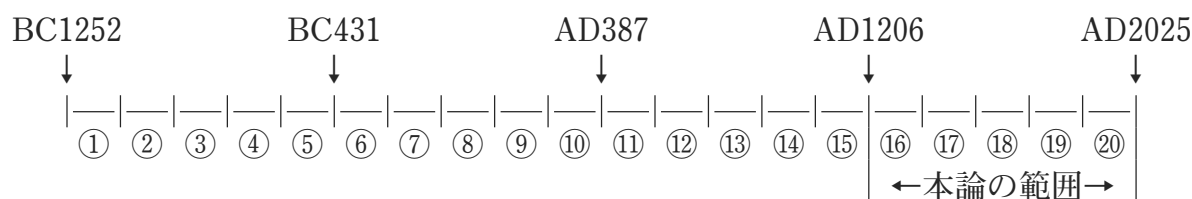
以上は地球を中心にしてみた場合で、太陽を中心にして見ると、この二つの時期の海王星の春分点通過の区切りは、一八六一年十二月十一日と、二〇二五年九月七日または八日である。⁽⁴⁾

天象と地象、すなわち〈天空の惑星等の動きと地球上のさまざまな活動〉が相関しているという前提をもとにするなら、この海王星の春分点通過に代表される新しい時代の潮流がすでに押し寄せてきている。われわれはそれにどのようなように対処して生きていけばよいのだろうか。

それを知るには、まず歴史を振り返り、海王星の春分点通過という現象が、過去、どのような形で地球上の出来事と相関していたのかを、たとえば大ざっぱであれ把握することが役立つ。そこで、本論では同様の天文現象が起こった時を含む、過去八百年（正確には海王星の春分点通過周期の五倍の八一九年）分の歴史を振り返ってみたい。なお、海王星に限らず、惑星の「秋分点」通過もまた春分点に劣らず重要な区切りとなるが、記述が細分化されるので、今回はおもに春分点通過のほうを取り上げる。

約一六四年の海王星の春分点通過周期は、他の天文周期との「同期」という面で、その三倍、四倍、五倍、六

▼図表 1：海王星の春分点通過周期の 5 つ分（819年）× 4 = 全20周期 = 3276年



※上記①～⑳は、平均163.7年の各周期につけられた番号（連番）である。

倍、七倍、九倍などのまとまりをつくる。たとえば三倍の四九一年の周期の場合、そのあいだに冥王星は二回、春分点を通るといった具合である。このような「同期」を考え、周期に対する考え方は多様化し、複雑化するが、今回の拙論では約一六四年の単独の周期とともに、その五倍にあたる八一九年の区切りをわれわれの歴史に当てはめて考察する。

本論は一言で言うと、西暦一二〇六年以降の世界史を一六四年ごとに五つに区切って、その特徴を読みとる試みである。なお、以下、見出しの西暦の区切りの上の表示がサイクル⑯から始まっているのは、筆者が海王星の春分点通過周期の二十回分を全体の枠組み、すなわち紀元前一二五二年から始まるサイクル①から、紀元後の二〇二五年に終わるサイクル⑳までの三、二七六年間の範囲として採用しているからである（図表1参照）。本稿は、その最後の五分の一の期間（サイクル⑯～⑳の八一九年間）に言及している。⁽⁵⁾

【サイクル⑯】▼一二〇六～一三七〇年

(1) モンゴル帝国とベネチアの時代

サイクル⑯は、モンゴル帝国の勃興およびその世界支配に代表される。世界規模での貴族政治から武人台頭の時代への移行がなされる。

西暦一二〇六年は、本年二〇二五年までの八一九年間のサイクルが始まるという意味で、大きな区切りとなる年である。西暦三八七七年からの八一九年周期はこの年で終わり、新し